

R5年度 学校自己評価の項目別考察と来年度への改善案

【0 めざす児童像】

○「学びの基盤づくり」を大切にし、授業の形態や展開を工夫することで、児童が「自分の意見を持ち伝えること」「他の子の話や意見を聞くこと」の定着につながり、仲間とともに学び合う姿が育ってきている。

→ペアやグループ活動の取り入れ方や学び合う視点を明確にした授業や行事を計画し、成果や課題をもとに実践の改善をさらに進めていく。

○自他のよさに気づき、適切なかかわりや声かけのできる児童が増えている。反面、つまずきや失敗（嫌なこと・不安なこと・苦手なこと）への対応が苦手で、不適切な言動をとったりすぐ諦めたりする児童もみられる。

→学級・学年（同年齢集団）と異年齢集団の両面から人間関係づくりをとらえる。

失敗を恐れず挑戦させる・やりきらせる活動や、自己肯定感や自己有用感を得られる活動を多く設定する。

不安やストレスへの向き合い方や対処について、専門家と連携をして授業づくりを行う。

（特別活動担当、生活指導担当）

→児童の特性理解や適切な関わり方について、専門的な観点から研修を行う。

（教育計画・研修計画担当）

【1-1～5 学習指導等】

【研究テーマ（案）】

学ぶ楽しさに気づき求める子の育成

～考えをもち、かかわり合いながら学ぶことを通して～

研究教科：国語、算数、理科、社会、生活、総合、特活、道徳から選ぶ

【学ぶ楽しさとは・・・】

できなかったことができるようになった、わからないことがわかった、何だろう（問い）、好奇心、新しいことを知る、わかったことが使える、夢中になる、人それぞれ考え方が違うということを知ること

（1）上記のことを教師が意識し、教材研究を行い、意図的に授業を仕組む。

（2）上記のことを行うための、基礎基本・学級づくりも大切にする。

（3）振り返り（おわりのひとり学び）を意図的に行い、おもしろかった、楽しかったことを児童自身に意識させる。

（4）「学ぶ喜び」を児童と共有する。

【ひとり学びやみんな学びの充実】

（1）ひとり学びの工夫

・発問の工夫

・書けない子への支援（発問の工夫、ヒントカード、ワークシートの工夫、できた子のひとり学びを参考にする）

- (2) ペア学び・グループ学びも適宜取り入れる。
- (3) みんな学び（話し合い活動）の充実。特に学級会や4教科、道徳で取り組みやすい。自分のやりやすいところからやっつけていこう！
- (4) みんな学びの留意点
 - ・教師が出すぎない
 - ・待つ
 - ・しめた！と思ってすぐにしゃべらない
 - ・おうむ返しを減らす
 - ・賛成・反対意見をつないでいく
- (5) 振り返りの充実
- (6) 特支学級は、特に関わることが苦手な子が多い。かかわり合いを大切にする。ソーシャルスキルトレーニングも取り入れる。

【声づくりへの取り組み】

- (1) 一人ひとりが声を出す場面（音読・発表）を、教師が意識的につくる。
- (2) 国語の時間の最初は、音読をする。音読の回数を増やし、読むことに慣れさせる。
- (3) 音読や発表で大きな声を出すことを全員にさせきる。（あの子は無理だから…は×）教師の粘り強い取り組みが必要。
- (4) 音読の目標を明確に示す。「大きな声ですらすら」は全学年の目標。学年が上がるにつれて、表現力をプラスしていく。
- (5) 文読みや段落読みのはじめ、教師の適切なコメント（評価語）を。褒めたり叱ったりしながら、個に応じた対応力を教師が身につける。
- (6) 環境づくり（基礎基本・学級づくり）を行う。

【朝の学習への取り組み】

- (1) 語や算数の基礎基本の定着・音読の時間にする。
- (2) 計画的に取り組む。
- (3) 取り組み内容は、学年で話し合う。

【校内研修の充実】

- (1) C（研修）を受けてAを行う→PDCAとつなげていくという意識を教職員がもつ。
- (2) 全校授業は、授業時間前に集まることを基本とする。
- (3) せっかく素晴らしい先生方がたくさんおられるので、授業を見に行きましょう。
- (4) 積み上げを大切にできる教師集団でありましょう。

【1-6 ICTの活用について】

支援員さんの活用が進んでいる学年、教科では、ICTの活用状況が高い様子である。そのため、次の2つを提案する。

- ① 学年分掌に「情報教育」を位置づけて、「情報教育委員会」を設置する。
学年分掌の中に「情報係」を設定し、学年の中での困りごと等を吸い上げ、支援員さんとやりとりをする。
- ② 各学年の情報係はHPの更新も担う。

【2 小中学校間(滝野地区)の学びのつながり】

- 「トライやる・ウィーク」の機会に、外国語科でできることがあれば「提案」として やってみる。
- 小中連携では、小学校の英語の授業を中学校の先生にも拓いていく方法を模索する。
- 小中一貫校に向けては、所員会の進み具合や、具体的な検討事項の予告などについてお知らせしていく。(情報共有)

【3 特別支援教育】

- サポートファイルや「個別の指導計画」を作成・活用がしやすいものにする。
 - ・年度初めの職員研修で、年間スケジュールや作成上の留意点を分かりやすく伝える。
 - ・定期的にエピソード記録や「個別の指導計画」の手立て・評価などの追記や見直しができるよう、声掛けをしていく。
 - ・新たにサポートファイルを作成する場合には、児童の実態把握をしたり、保護者との面談に同席したりする。
- 効果的な交流及び共同学習を進める。
 - ・特別支援学級児童の実態に応じて、教科・領域、評価、どう支援するか等について特別支援学級担任と交流学級担任が連携をする。
 - ・年間指導計画を立案する段階で、国語や算数等の教科でも交流学习ができそうな単元については確認しておく。
 - ・通常学級の特別支援教育推進の視点からも、特支担任の同室指導や空き時間の交流指導等ができる範囲で行う。
- 滝野地区小中一貫校の開校を視野にいれ、3校の特別支援学級の交流会を今後も続けていく。

【4 生活指導 】

- 全職員で共通理解したことは、一貫性のある指導をしていく。
 - 例:「くらしのやくそく」→介助員、チューター等も含め、教職員全体へ確実に周知
- 毎月の生活目標は朝会で伝えるだけでなく、掲示物を作り、各学級において、その都度振り返るようにする。
- 生徒指導事案については、事案の大きさに関わらず、報告・連絡・相談をし、チーム に対応することを徹底する。
 - △情報共有が一時にとどまる → 職打、職員会、校支援での期間限定データ公開
- 不登校対応については、情報の共有を来年度も細かにいき、対応が遅れないように相談体制も整える。→ R6～「不登校支援」専門家と連携 ケース会議・夏季校内研修
- ふれあい班やクラブ活動などを通して、異学年交流を推進し、子ども同士の豊かな人間関係づくりに努める。
- ネットトラブルについては、教育講演会を通して、専門家から児童及び保護者の研修の機会を持つ。 → 授業カリキュラムへの位置付け・市内ネットルール

- ・家庭でのネットトラブルについては、学校と家庭が協力して進めていく必要がある。
- ・校内ネットルールの見直しを行う。
- ・タブレットの使用についてのルールの見直しや再確認を行う。

【5-1～3 道徳教育・人権教育】

- 継続して、親子読書を2学期に行う。2学期の学校オープンでは、全学年道徳の授業を実施する。親子読書をする題材は学年ごとに指定する方がよい。
- 道徳の授業で扱った価値と日常生活をつなげる機会を設ける。終わりの会などで、日常生活と価値と題材をつなげた振り返りをする。 (道徳担当)
- 人権教育は学校教育全体に関わることなので、道徳教育だけでなく、すべての教科・領域で意識して取り組んでいく必要がある。 (人権担当)

【6-1 体育】

- 年間を通じて、朝会を活用した毎週の全校での取り組みができた。来年度は、柔軟性に加え、足育や脳トレも取り入れた滝っ子体操を実施し、体力向上に努めたい。
- 柔軟性を高める取り組みの3年目になるためはっきりとした効果の検証を行う。

【6-2 防災・安全教育】

- 年度当初から研修を行っていく
 - 警報装置やベルの止め方、防災シャッター、防災ホットライン等の使い方や仕組み
安全点検の箇所・ポイント、管理職不在の場合を想定した対応 など
- 一斉下校の際の、並ばせ方や指導の仕方を年度初めに統一する。(基本は全員で注意を行い、地区担当も同様とする。)
- 1月の避難訓練は、阪神淡路大震災に合わせて、地震での避難訓練とする。

【6-3 食育】

- 栄養教諭の訪問、社高校生の訪問など、よい食育の機会となる。積極的に取り入れる。
- 委員会活動の内容について、放送・呼びかけ等、引き続き工夫して取り組む。
- 実践内容については、①教科との関連・生活・総合 ②給食 ③特別活動(学級活動・学校行事・児童会活動) ④個別指導 ⑤家庭・地域との連携 となっている。授業で扱うことだけでなく、日ごろの取り組みも食育につながっていると意識し、指導していく。
- 栽培活動や調理実習などは、各学年のカリキュラムに合わせて取り組んでいく。調理実習の際には、指導体制・アレルギー等にきちんと配慮し、事前確認からしっかりと計画して取り組む。
- 食育の全体計画、各学年のカリキュラムの見直しが必要。以前の教科書の内容が残っていたり、活動内容が更新されていなかったりする。年度末に、各学年で1年間の取り組みとして、新たに加えた内容や、残したい内容を考え、書き換えていく。

【7 働きやすい職場環境づくり】

- 業務内容の優先化・精選化に努める。
- 今後も水曜日を会議デーとし、内容を精選して実施する。
- 掲示板や共有ボード、事前配布資料等を活用し、会議を効率よく進める手立てを講じる。

- 教育効果を考えた行事等のあり方（内容や種目・演目、練習時間や提案時期など）を、コロナ状況下でスリム化されたことの効果と課題をもとに、引き続き検討していく。
- 前年度・当年度の授業時数累計や行事の振り返りをもとに、教育課程（時間割）の見直しを行う。

【8 学校・家庭・地域が一体となった豊かな教育環境づくり】

- かとう学は、社会科においては3・4年生の地域素材として有効に活用することが可能である。他の学年においても、中心的な教材としては扱えなくても、地域の素材を生かして、文章をまとめた統計的な情報として活用したりするなど、地域への愛着をもつきっかけとして活用できるように促していきたい。（「総合」担当者研修会をうけて）
- シニアクラブの活動の打合せについては、福祉センターの方に進めていただく。
- 舟運の学習のノウハウをデータ化していく。→ 夏季休業中 職員研修・現地学習
郷土資料館の活用（資料・職員）
- 積極的に人材や地域教材を開発し、共有する。

【9 その他】

- 教師自身が、物を大切にすることや整理整頓などの意識を高め、クラスや学校全体での児童に対する意識付けの基盤とする。
- 風通しのよい「報告・連絡・相談」体制を進め、全職員の情報共有と共通理解のうえで一貫性のある指導を行う。
- 各種委員会を定期的に開催して機能させ、業務改善の方策を考えていく。
（感染症対策、個人情報の取扱い、会計処理、公費購入に際しての事務 他）
- 児童生徒名簿や、口座情報入力・システムの作成など、年度末や年度初めに集中して取り組む個人情報に関する業務の代替（軽減はないので）が望まれる。